issue2

障害の先で得た新たな未来。人生をともに歩む理学療法。

バイク事故で脊髄損傷により、下半身を動かせなくなった齋藤和也さん（以下齋藤さん）。しかし、齋藤さんは、この過酷な試練を乗り越え、現在、言語聴覚士として活躍されています。今回、齋藤さんと、担当理学療法士だった　菊池善愛さん（以下菊池さん・国立病院機構村山医療センター）のお二方に、社会復帰までの経緯や、そのときに抱いていた思いをお話しいただきました。

写真（左）
国立病院機構 村山医療センター
理学療法士
菊池 善愛さん

写真（右）
社会福祉法人聖ヨハネ会 桜町病院
言語聴覚士
齋藤 和也さん

真っ白になった未来 バイク事故で下半身不随に

齋藤さん：大学生のとき、事故で脊髄を損傷し、下半身が動かせなくなるという障害を負いました。当時は非常に辛かったです。自由がないことの苦痛は、非常に耐え難いものでした。

菊池さん：でも、彼は、あまりその苦しさを表に出さずにリハビリテーションに励んでいたと思います。当時、私は理学療法士4年目で、脊髄損傷の患者さんを担当するのは初めてだったのですが、頑張る彼の姿に、勇気をもらっていた記憶があります。当初、息子さんの障害に戸惑っていたご両親も、その姿を見て、心強かったのではないかと思います。

齋藤さん：正直、当時は、その日その日を過ごすことが精一杯でした。先を考える暇もなく、若かったということもあり、将来のことに考えが及ばないという状態でした。だから、菊池さんのもと、自分ができることに全力で取り組んでいました。

退院までのリハビリテーション 自宅での生活に向けて

菊池さん：リハビリテーションの目標は、日常生活を一人で行えるようになることでした。怪我によって、それまでの生活と一変するわけですから、それに対応できる能力をしっかり身に付けてもらいました。特に、持久力、車いすの操作、バランス、スピードコントロールを確実に獲得できるようにリハビリテーションに取り組んでもらいました。

齋藤さん：はじめは、車いすの操作がうまくできず、何度も転びそうになっていました。今は当時のリハビリテーションのおかげで、身体の一部の様に動かせています。他にも、トイレや入浴などの日常生活で必要な動作の練習を行っていました。そうした入院時のリハビリテーションが、いまの生活の基盤になっているとよく感じます。

菊池さん：やはり身体面の向上だけではなく、理学療法士の視点で家屋や周辺の環境を把握し、実際の生活を見据えたリハビリテーションを提供することで、安心して自宅へと戻れるのだと思います。

齋藤さん：確かに自宅での生活には不安がありました。そのため、退院前に一度外泊ということで自宅に戻りました。そこで自宅が病院と違うものだとはっきり知ることができました。その経験があったからこそ私自身も具体的に自宅生活をイメージしながら、トレーニングができたと思います。

菊池さん：さらに、ご家族と一緒に自宅の改修について、よく打ち合わせを行っていました。ご自宅のことは、一生のことですから、齋藤さん自身、またご家族としても不安が大きいところです。そうした不安が解消できるよう、改修内容だけでなく、費用のアドバイスや、公共福祉サービスの紹介といったかたちで可能な限りサポートしていました。

新たな未来へ 車いすのセラピストとして活躍

齋藤さん：私は入院中に、大学を退学していたので、退院後にどうしようかと考えていました。そのとき、担当医師から言語聴覚士の職場を見学してみたらという提案がありました。退院後も定期的に病院には通っていたので、そのときに見学をしました。そこで、車いすの私でもできる仕事だと感じ、何より自分が体験したリハビリテーションを誰かに還元できたらいいなと思い、言語聴覚士を目指す決心をしました。

菊池さん：その話を聞いたときは、うれしかったです。それに、彼は話をすることが得意で、入院中にも周りの高齢者の方と話をしている姿を見ていましたから、彼にぴったりの仕事だと思いました。彼の夢を実現できるよう、よく相談に乗っていましたね。

齋藤さん：当時は、言語聴覚士の学校が少なく、車いすでも通えるとなると限られていました。菊池さんにも、学校探しを手伝っていただきました。私の動作能力を踏まえた助言が心強かったです。そして、なんとか見つけた学校に3年間通い、卒業することができました。卒業後は、新潟の病院に1年間勤務後、この病院にセラピストとして戻ってきたんです。戻ってきたときは、本当にうれしかったですね。

菊池さん：齋藤さんが当院で働いたら、患者さんにとってもいい影響があるのではないかと思いました。当院では、脊髄損傷の方を多く受け入れています。その場に同じ障害を持ちながらも、社会で活躍している人がいたら、患者さんにとって心強いのではないかと考えました。それは、結果的に齋藤さんにとっても、良かったと思います。

齋藤さん：そうですね。私としても、その方たちの力になれることがうれしく、より集中して仕事に取り組めたと思います。現在は、別の病院で働いているのですが、ここで経験できたことは大きかったです。

患者さんに近い気持ちで寄り添いともに人生を歩む

齋藤さん：セラピストになってよかったと思います。誰かに感謝されるということは、素直にうれしいですし、いま独り立ちできていることは自信になっています。

今後は、「車いすのセラピストは腕がいい」と口コミで広まってほしいと思います。私だからこそ、より患者さんに近い気持ちで接することができると思います。そうすることで、私が菊池さんを信頼していたように、患者さんに信頼してもらえるような人間になりたいと思います。

菊池さん：私もまた、齋藤さんと一緒に過ごしてきたことで、理学療法士として成長できたと思います。特に若い患者さんは、仕事をし、自立しなくてはいけません。しかし、将来のことは、なかなか想像できないものです。そのときには、齋藤さんのような人生の先輩たちのことを伝え、すこしずつ歩んでもらえたらと思います。私はそこに寄り添い、彼らの新たな人生をともに歩んでいきたいと思います。